

巻頭言



情報処理と日本語

山田 尚 勇†



漢字の数が多いために、わが国の情報処理は依然として日常生活に使われる表記法以外の形でおこなわれている。さいわい印字技術と字母メモリの急速な発展は、出力に関する見通しを明るくしている。しかし入力法に関しては事態はそう楽観できない。

熟練すれば鍵盤を見ないで打て、また手書きの数倍速い、めくら打ちの英文タイプライタは久しく普及しており、アメリカでは数百万人の職業タイピストが就業している。だからコンピュータの入力法も、その延長として自然に決ってしまった。わが国の一字ずつ拾って打つ目視式の和文タイプライタは、せいぜい手書きの速度しか出せず、浄書機としてはほそほそと使われている。漢字テレタイプの多段シフト鍵盤では、かななどがめくら打ちできるようになるので手書きの2倍位の速度にまではなるが、目視は欠かせない。この日本語入力の高い速度と劣った労働条件を、大企業は大口作業のほとんどを零細な下請け企業に外注することで逃げてしまっている。この「知らなきゃ苦にゃならぬ」態度は、経済的にはなり立っても、人間的、技術的解決にはならない。

しかし、この10年足らずの間に欧米タイプライタの鍵盤を使っての、10指にあまるセミ・タッチ式やタッチ式の漢字入力法が研究され、そのいくつかは既に実用にされている。われわれの先入観に反して、その実務速度は案に1分間150字位になり、その技能習得もアメリカ人が英文タイピストになると同程度の易しさである。現在短大を含めた大学卒の女子は企業に平均2年半在職するという。新入社員をタイピストとして社内訓練しても、2年半の在職期間には和文タイプやタブレット入力法の者の3.5倍以上の仕事量をこなしてくれることになる。

日本のブルーカラー労働者の生産性が世界の水準になったいま、そのホワイトカラー職の低生産性を世界の水準に上げるのが急務となっている。そしてそれ

には仕事の専門化と技能の高度化とが欠かせないにもかかわらず、日本語の入力法としては依然として、しるうとがすぐに使えるものが望まれている裏には、高度の技能を身につけたタイピストという全く新しい職種集団を企業組織内に確立するというような革新は、新入社員をすぐに使って処理しなければならない仕事に囲まれている末端のマネジャーの手に負えるものではなく、企業全体の合理化と高能率化を価値判断の基準として号令できる上層経営者によってのみはじめて実施できることとなるという事情がある。しかもこの辺の事情に詳しい、メーカーの技術者やセールスマンは一般にはそのような上層部に対するコミュニケーションの道を持っていない。

そしてここにはもう一つ微妙な問題が絡んでいる。わが国では男性にはますます高度の教育と専門的能力が期待されているにもかかわらず、事が女性の職種となると手のひらを返したように特別の能力も訓練もない非能率な集団によって構成しようとするのである。このたび労働基準法研究会は職場での女性労働者の保護しすぎがかえって男女平等の妨げになるとして、保護措置の規定を根本的に改めるように労相に諮問した。しかし、女性に対する時間外労働の制限や危険有害業務の就業制限などの撤廃の前に、天性によって男性をしのぐ能力を発揮できるとされるタイピストのような職種において女性がプロとしての高度の技能を身につけることを要求し、またそれに応えてくる女性には地位と責任をどしどし与えるほうが、つまるところはもっと実り多いのではなからうか。

われわれ情報処理にたずさわる者は、目先のせわしさにまどわされることなく、原点にたち戻り、広い国際的視野から日本語の処理の問題を考え、国家百年にわたる生産性を思い、たとえ行く道は峻しくとも、抜本的対策をとるべきではなからうか。皆さんの卒直な御批判をいただければ幸である。

† 本会常務理事 東京大学理学部情報科学科 (やまだ・ひさお)

(昭和53年12月1日)